

油飯

玉子せん、しい竹、きくらげ、こほりごんにやくほろく、どうふ、あはび、あび竹の子、右のこらすこまごまにして、うすあぢ付めしへませる。

〔倭名類聚抄^{十六}〕油飯 楊氏漢語抄云、膏味和名阿不麻油炊飯也、一云玄熟良以比

〔箋注倭名類聚抄^四〕膏餅 膏味、玄熟未聞、禮記、狼臠膏與稻米爲配、注似今膏屨、集韻、饋古作屨、釋名、肺

臘、臘饋也、以米糝之、如膏饋也。

〔類聚名義抄^八〕油飯

〔設草小言^三〕今蝦夷飯食ニ、油ヲ加エテ喫ス、我人コレヲ異トスレドモ、内則ニ淳熬煎醢加陸稻上沃之、以膏曰淳熬トアル、正義ニハ陸地之稻、恐其味薄、更沃之以膏、使味相湛、漬曰淳熬ト見エタリ、周俗モ如此ナレバ、アヤシムニタラズ、

染飯

〔昨日は今日の物語〕一山でらほうし、さる御ちごにほれて、略中ひん僧にて、なに、ても御ふるまひをいたさうやうもない、せめてこれなり共御なぐさみにとて、たいたう米のめしを出しければ、御ちご御らんじて、是はうつくしき色やとおほせられた、其時三位まかり出申やうは、たまさかの御こし、まことに身にあまりて忝く存て、せめての御ちそうにとて、米をそめさせ申たるといへば、御ちごさこしめして、げにもさう見えて、たいたうめしのやうなと仰られた、

〔信長公記^{十五}〕天正十年四月十五日、田中未明に出させられ、藤枝の宿より瀬戸の川端に御茶屋立置、一獻進上申さる、瀬戸川こさせられ、せ戸の染飯とて、皆道に人の知所有、

〔東海道名所記^三〕瀬戸の染飯は、此所の名物なり、そのかたち小判ほどにして、こはめしに山梔子しなをぬりたり、うすきもの也、男、

染飯は黄色なりけり、たび人はあはちの瀬戸とこ、をいふべき、とよみ侍べり、誠に粟飯は黄なるものなれば、かくよみけるにや、